

ろう者が制作した本格的な映画



なつかしい風景

柔らかな会話

ひたむきな人達

小さな下町

くさくらの詩

忘れていた何かが
こたまとなって
返ってくる...

昭和二十五年、東京下町に生きたろう者は、どのような青春を送ってきたのだろうか。

(財)全日本ろうあ連盟が発足して三年目。

まだまだ、障害者ということでは白い目で見られていた時代。

あらゆる面で差別を受けていた

彼らは何を考え、差別と戦い、

ろう協会を設立して来たのだろうか。

恋愛、友情、ろう者であるか故の苦しみ...

下町に暮らすろう者男女人情と

郷愁を描いた感動のヒューマン

ドラマ。



おおだて のぶひろ監督作品

全国各地から
大反響と感動続出!



2001年度作品 デジタルビデオ 1時間30分 カラー 字幕スーパー
製作著作:デフムービーエンターテインメント「プロディア」
協力:墨田区聴覚障害者協会 東京都ロケーションボックス 他

DEAF MOVIE ENTERTAINMENT デフムービーエンターテインメント
PRODIA プロディア

<http://www.prodia.jp>

懐かしい手話の旋律。
ふと気付けばスクリーン
の風景と一体になっていた。

四十代のろう女性

(財)全日本ろうあ連盟
(社)東京都聴覚障害者連盟
推薦

小さな下町

～さくらの詩～

あらすじ

自身もろう者である映画監督、おおだてのぶひろによって二〇〇一年に製作された、ろう者のノスタルジードラマです。

昭和二十五年、まだまだ障害者というだけで白い目で見られていた時代、東京下町に生きたろう者はどのような青春を送ってきたのでしょうか。

製作所に努めるろう者の工員、田村勝は当時の世間の障害に対する理解の無さに悩まされ、憤りを感じる。そんな勝がろう運動家の講演会に参加したときに、同じろう者の墨田さくらと出会う。勝はさくらとの楽しい日々を過ごす一方で、様々な壁にぶつかりながらも、ろう協会の創立に奮起していく。そんな下町のろう者の人情を詳細に映し出されています。

あらゆる面で差別を受けていた彼らは何を考え、差別と戦い、ろう協会を設立してきたのでしょうか。恋愛、友情、ろう者であるが故の苦しみ…。下町に暮らすろう者男女人情と郷愁を描いた物語です。



1950年（昭和25年）前後のろうあ団体設立

1947年 群馬県・伊香保温泉で全国ろうあ団体代表者協議会の開催
「全日本聾唖連盟」が発足する。

1948年 現在の「日本聴力新聞」の前身となる「日本聾唖新聞」の発行
全日本聾唖連盟第一回大会が京都で開かれる。

1950年 「身体障害者福祉法」が施行される。
→ろう者の生活と福祉に変化の兆しが。

（全日本ろうあ連盟『詩りをもって未来へ～ろうあ者の権利保障と手話の言語的認知を求めて60年』、『ろうあ運動のあゆみ1908-1971：第20回全国ろうあ者大会記念誌』より）

『小さな下町～さくらの詩～』は海外でも好評を得ている。「日本・チュニジア外交樹立10周年在チュニジア大使館主催文化事業『日本映画週間』」でも上映され、大好評を博した。



（写真左はパンフレット、写真右は上映前の様子）

おおだて監督にこの作品を制作するにあたっての心境などを伺いました。

Q：『小さな下町～さくらの詩～』製作時に苦労したことはありますか？

A：昭和25年の設定なので昭和時代の風景を探したのですが、簡単ではありませんでした。理想的な建物が見つかったもののあっさり断われてしまったことも度々ありました。特にガリ版の印刷物は僅かしか残っていない貴重なもので簡単に借りられなく、3度も粘って交渉し、やっと借用できました。

Q：『小さな下町～さくらの詩～』を通して伝えたいメッセージや見てほしいところはありますか？

A：映画やテレビの手話シーンは聴者の視点で作られ、どちらかと言えば芝居的です。

この作品ではろう者自らの視点で捉えた日常生活の手話で話すように心掛けていました。また、指文字がまだ普及していないため、空書きが多かったのでその時代に合わせました。古い記憶の残像という手法で取り入れているので、黄昏のような感覚で鑑賞できるように目指しました。

Q：『小さな下町～さくらの詩～』は昭和25年前後のお話ですが、このごろのろう者の状況やろう運動に対して感じることはありますか？

A：当時は、身体障害者福祉法が施行されたが、ろう者の権利はまだまだの状況で差別や偏見を無くすためにろう者自身で団結し全日本ろうあ連盟を結成しました。その影響で地域のろう協会を設立し始めた、いわばろう運動の草創期であったと思います。

